く、その他界なり天国などにゆきつく舟旅の描写にも似通う点が多いのである。シエリの「プロメシウス、アンバウンド」等はこの点大いに漱石の参考になったのではなかろうか。「プロメシウス・アンバウンド」を漱石が精読したばかりでなく、それについて深い研究をしていたことはロンドン滞在中彼が教えを受けたクレイグ氏からロゼッティの "A Study of Prometheus Unbound" をわざわざ借りて読んでいることや、同氏との文学談義にたえず、シエリを話題にしたこと等からも明らかである。又、漱石の浪漫主義は決して夢のみをみつめてのものではなく夢のアニチテーゼとしての現実についての意識乃至自覚にたえず裏づけられていた。それだからこそ彼には後年の写実小説が可能だったわけであるが、同様にシエリの浪漫主義にも現実の諸問題に対する関心が強い裏づけとなってあらわれていた。両者とも暴力否定を主張し無血革命を唱導した。シエリの論文集と漱石の「二百十日」を読めば二人のこの意味に於ける共通性がよくわかる。「二百十日」は「野分」白井道也に、又「猫」にもひきつがれて漱石の一面を語っている。もっとも漱石の政治的関心はシエリの場合のように一貫したものに発展することはなかった。

次に漱石の英詩をシエリの詩と対比してみるといくつかの点に興味が湧く。イメージの類似は両者に於て顕著であるが漱石の詩は静的で想像力にとぼしく、美女に黄金の髪、大理石の腕、雪の如き胸をあたえても、又彼女を星の光の中に浮き出させてみても、そこには生命がなくただ概念のみが形骸化している。シエリの現実飛躍、それによる詩的真実への接近はなく、実体を缺く美女に当然霊的身軽さをあたえねばならぬのにそんな配慮も一切ない。しかし、表面的技巧に関する限り類似はイメージにとどまらず二つのスピリットを対立させ問答させる形式といい又好んでコントラストを用いた点といい激した感情が急に冷却してそこに断層の生じる状態をよんだ詩といい全く類似している。思うに漱石の英詩は成功作とはいえずシエリから借用した技法を充分生かすことなく、彼は英詩の世界とたもとを分ったものと思われる。とにかくシエリが漱石にあたえた恩恵は以上の諸点をはじめとして更に「文学論」での十二回にわたるシエリの引用からも、かなりなものであったと断言出来るのではなかろうか。

否定、即、肯定の宗教

舟橋一哉

仏教の要諦は「真空妙有」という言葉で表わすことができる、と言われている。この「真空妙有」を現代語で「絶対の否定はそのまま絶対の肯定である」と言いなおしてもよいと思う。それで仏教の教義において、この「否定、即、肯定」ということが、どのような面にあらわれているか、原始仏教から親鸞に至るまでのあらゆる仏教の教えの上に、「真空妙有」がどのように示されているか、そういうことを明かにすることによって、真宗学における仏教学的基礎も明瞭になると思われる。そういうことを大体において四つの方面から眺めて見たい。

一、仏教における無形的表現と有形的表現。

このことについては、「仏教学セミナー」第二号、第三号に相当詳しく述べておいたから、ここでは結論的なことだけを一言するならば、こういうことである。仏教においては、無形的表現がそのまま有形的表現であり、有形的表現がそのまま無形的表現である、といえる。そういうことの論理的根拠は「真空妙有」ということである。そしてその場合、無形的表現に重点がおかれて教えが説かれるときには、その教えは哲学的・合理的なものになって、知識人の教養的要求を満してくれるが、反面、観念論に堕する危険がある。原始仏教の如きがその代表的なものである。これとは反対に、有形的表現にかたよりすぎて教えが説かれるとき、いわゆる宗教性が豊かで、大衆の宗教的要求を満してはくれるが、反面、その教えは神秘的・呪術的なものになって、ややもすると迷信に堕する危険性がある。密教がその代表的なものである。ともあれ、仏教の教えの中には、この無形的表現と有形的表現とが一つになって説かれている一面があって、それが仏教の特色をなしていると思われる。

二、機の深信と法の深信

「否定、即、肯定」を「このままではいけないが、このままでよろしい」と言い直すとき、そういうことが「機法二種の深信」といわれる。それ故に、二種深信は直線的に理解すべきではなく、相互運動的に理解すべきである。なぜならば、「否定、即、肯定」はまた「肯定、即、否定」でもあるからである。二種深信を相互運動的に理解すべきである、ということは、「否定、即、肯定」という立場に立って初めて言い得ることではないであろうか。

三、柔軟心

「柔軟心」とは、「やさしい心」ということであるが、「弱い心」ということではない。強いか弱いかといえば、強いのである。しかし「頑固かたくな」ではない。だから強そうには見えないが、本当は強いのである。そういうことも、「否定、即、肯定」で説明がつきそうである。すなわち「真空妙有」をもって示されるところの仏教的真実が、わが身の上に実践せられていくすがたが、「強そうでないが本当は強い」ということであり、それを柔軟心というのである。

聖徳太子の十七条憲法を見ると、第二条には、「篤く三宝を敬え」と示され、ここに見られる太子の信念は非常に強い。「少なくとも日本の国に生を受けた者は、一人のこらず仏教を信じなくてはならない」という、何人をも寄せつけない気魄がそこにみなぎっている。ところが第十条へ来ると、「共に是れ凡夫のみ」とあって、ここでは素直に他人の意見に耳を傾け、謙虚にわが身を反省していこうとする、謙虚さが表に出ている。このように、相互に矛盾しているかのように見えるやさしさと強さが、一人格の上にうるわしく調和して実現せられる、そこに柔軟心がある。

四、純粋にして寛容なる宗教

インド教は寛容ではあるが猥雑である。マホメット教は純粋ではあるが偏狭である。「純粋」ということは宗教としては勝れた性格であるが、純粋は偏狭と隣り合わせであって、偏狭は克服されなくてはならぬ。寛容は望ましいが、猥雑では困る。一般的に言って、西洋の宗教は偏狭であり、東洋の宗教は寛容である、とされるが、寛容でありながら純粋であり、純粋でありながら寛容であるところに、宗教として最も勝れた形態がある、と見られ

る。仏教三千年の歴史は、一口に言えば猥雑から純粋への歴史であった、と見ることもできる。「選択」とは純粋化の論理である。あらゆる宗教の中で、純粋にして寛容なる宗教が最も勝れた宗教であり、それはすなわち仏教であり、仏教の中でも最も純粋にして最も寛容なる宗教は親鸞の宗教である、ということが言えそうである。これも「否定、即、肯定の宗教」ということで説明できるようである。

他に次の講演がありました

知識と伝道　北西　弘
（次号に論文として掲載予定）

善導と「起信論」　藤原幸章
（本号に論文として掲載）

プラトンの神観
——「ティマイオス」研究序説——　金松賢諒
（本号に論文として掲載）

大谷大學研究年報　第十九集

真宗の二方面……金子　大栄

Sanskritic Hinduism と Peasants Hinduism ……佐々木現順

自然教育論……太田　祐周
——ルソオ教育学小論——

無常感……渡辺　貞麿
——平家物語の心——

十一世紀以降の中国仏教教線の概況……滋野井　恬